

C. 生徒指導研究

I 生徒指導上の当面する諸問題——実態調査を踏まえて——

川田 基生 倉田 有邦 酒井 為久 田内 公望
長岡 咲子 羽田野敦子 原 幸宏 丸山 豊
安井 弘美 山本 岩男 米田 閏一 米山 誠

〔I〕研究課題と研究経過

米 山 誠

私たち生徒指導研究グループの、昨年度（1985年）から今年度にかけての研究テーマは、「生徒の自覚・判断力を高める自主性と規律の指導」である。この研究グループが過去10数年来かかわってきた研究課題は、年度により、とりあげた具体的事項や題目に変化はあっても、一貫して、生徒それぞれの自主性を尊重する指導と同時に、集団生活における規律や責任感を重視する指導をどう進めたらよいか、ということであった。

もともと本校（中学・高校）の教育方針として、「主体性のある人間形成」、「個性の伸長をはかること」がうたわれているが、日常的な生活指導の場面では、理想と現実との矛盾に絶えず直面させられてきたといってもよい。教育方針としての自主性・個性の尊重が、その反面、結果的に、安易な放任、惰性の空気の中で、無気力で恣意的な態度を蔓延させる傾向が無かったとはいえない。そのことは、本研究グループが55年度・56年度・58年度と再三、本校の中学生・高校生を対象に実施した調査の結果にも明白に表われていた。多数の生徒が、自由・自主性の尊重と同時に、もっと規律のある学校生活と、そのための厳しい指導を望み、表面だけの自由・自主性の教育への鋭い批判や不信感を示したのである。

学校全体としては、56年度以降今日までそうした生徒指導上の実態を踏まえて、徐々に従来の指導体制や実践への反省と改善を重ねたことにより、それなりの効果や前進も認められるが、依然として、ある面では旧にも増して、生活指導上の問題は多い。自由や自主性の本質的意味、真のきびしさが理解できず、自由と放縦とを混同し、集団生活の規律、けじめを守れない生徒が多いのである。このような現状にどう対処したらよいか。いたずらに一方的な管理指導を強化することによ

らず、生徒一人ひとりの自覚や価値判断の能力を高める指導を進めるためにはどうしたらよいか。これが、本校での生徒指導の最大の課題といってよいであろう。

私たちの研究グループとしては、昨年度来、幾度かにわたって、中学生・高校生の生活態度の種々様々な実態について話し合い、検討する機会を持った。例えば、欠席・遅刻・早退・授業中の無気力な学習態度・私語・内職、宿題の提出物を出さないこと、忘れ物、落し物、盗難、校内清掃の不徹底さ、服装の乱れ、喫煙、バイク、いじめ等々の諸問題について話し合ったのである。そして、それらの具体的な事例を内容別に整理分類しながら、今後どのように諸問題に対応し、実践的研究を進めるべきかを論議した。その結果、最も日常生活習慣に関する問題を取りあげ、まず生徒たち自身がはたして、どのような見方・考え方をしているのか、意識の実態はどうか、を知ることから始めようということになった。そのことが生徒たちそれぞれの自覚と判断力を高めるような指導の鍵となると考えたからである。

そのために、グループのメンバーが問題別に分担して、中学生・高校生を対象としてアンケートを実施することになった。とりあげた問題と担当者は次の通りである。

- 授業中の学習態度について 安井・川田
- 遅刻・早退・欠課について 原・米田
- 忘れ物・提出物等について 酒井・田内
- 公共物の取扱い・盗難等について 倉田・丸山
- 清掃・美化について 山本・米山

以下は、アンケートの結果と、それについての考察である。グループ内での検討の機会が少く、きわめて不十分な調査ではあるが、今後、生徒たちの生活実態

への認識を深め、生徒一人ひとりの自覚と判断力を高める指導を推進するための資料として生かしたい。私たちの目ざす本来の実践的研究は、むしろこれから始まるのである。

(注) 米山 誠・原 幸宏「自主性と規律の指導における基本的な課題」(『名大教育学部附属学校紀要第29集, 1984』)

〔2〕授業態度について

安井 弘美 川田 基生

生徒の授業に対する学習態度は、学習活動の中で基本的、かつ最も重要な要素である。本人の態度の良否は、学習事項の理解度に大きく影響するだけでなく、他人の学習姿勢にまで影響を及ぼし、クラス全体の学習雰囲気を決する大きな問題であることは容易に想像できる。そこで本校生徒の授業態度の実態を把握するため1・2年の中・高生を対象にし、次の4項目についてアンケート調査を主体にして調査を行った。

①授業の様子、②本人の授業を受ける態度、③授業内容の理解度、④授業が騒がしくなる原因、④については記述式で自由に記入してもらった。

①授業の様子については、次のア～キの中から該当するものを○印で選択させた。

- ア. 楽しく、よい雰囲気である。
- イ. よく質問し、活発に意見交換が行なわれる。
- ウ. 熱心に授業をきき、静かである。
- エ. 先生が厳しいので、静かである。
- オ. 静かであるが、他の勉強などをしている。
- カ. おしゃべりが多く、騒がしい。
- キ. 騒がしい上に、勝手なことをしている。

その結果、それぞれの記号を選択した者の割合は、中・高生および全体として次の様な百分率であった。

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ
中学生	23%	6%	5%	8%	3%	43%	12%
高校生	22	1	7	11	10	32	17
全体	23	4	6	9	7	37	14

②本人が如何なる態度で授業を受けているかについては上の①のア～キの中から該当するものを○印で選択させた。その結果、中・高生および全体として次の様な百分率となった。

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ
中学生	17%	4%	27%	16%	9%	25%	2%
高校生	17	0	33	14	14	17	5
全体	17	2	30	15	11	21	4

③授業内容の理解度について次のア～カの中から該当するものを○印で選択させた。

- ア. ほとんど理解できる。
- イ. ある程度理解できる。(70%)
- ウ. 半分くらい。
- エ. 少ししか理解できない。(30%)
- オ. ほとんど理解できない。
- カ. わからない。

その結果、次の様になった。

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
中学生	12%	40%	41%	5%	2%	0%
高校生	5	33	38	11	7	6
全体	8	36	39	8	5	4

以上のアンケート調査結果について以下に考察を試みることにする。

授業が静かで、良い雰囲気のもとに行なわれていると感じている者は4割しかいない(①のア、イ、ウ、エ)のに対し騒がしいと感じている者は50%ほどもいる(①のカ、キ)。一方、約7割近くの者が自覚して熱心に取り組んでいる(②のア、イ、ウ、エ)のに、実際は約半数の者が授業が騒わがしいと感じとっている(①のカ、キ)。この一見矛盾する関係は、実は約3割近くの者が自ら騒わいでいることを認めている(②のカ、キ)が、大半は雰囲気に連られて騒がしくしているだけで、むしろ問題なのは4%の者(②のキ)が騒がしさの根源をなしていると思われる。そのため約半数の者が授業中、騒がしいと感じているのであろう。しかし、騒がしいからといって、授業内容が彼等に理解されていないかという点必ずしもそうではない。中学生の9割が半分以上学習内容を理解し、高校生でも7割5分の生徒が半分以上内容を理解している(③のア、イ、ウ)。中学から高校になるにつれ、学習の中味が難解になるのに、騒がしさは中学から高校になると増加するわけではなく、むしろかえって高校の方が減少傾向にさえあるように見うけられる(①のカ、キ)。これは中学と異なり高校では単位制で進級や卒業に影響したり、また教科の選択制が2年生より導入されているため自己の好きな教科が学習できるた